

平成 28(2016) 年度 授業改善アンケート実施報告

<全体の実施状況>

<科目群・科目種別の現状と課題> ※

- ・基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて
権藤 智之（基礎ゼミナール部会長、都市環境学部 准教授）
- ・情報リテラシー実践 I 授業改善アンケートの結果と情報倫理教育
永井 正洋（情報教育検討部会長、大学教育センター 教授）
- ・実践英語教育の授業改善アンケートについて – 授業改善アンケートの検討とこれからの課題 –
中村 英男（英語教育分科会座長、都市教養学部人文・社会系 教授）
- ・未修言語の授業改善アンケートについて
西山 雄二（未修言語科目部会長、都市教養学部人文・社会系 准教授）
- ・理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて – その現状、経年変化、今後の課題 –
森 弘之（理工学系 FD 委員会委員長、都市教養学部理工学系 教授）
- ・教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて
倉田 和浩（教養・基盤科目群検討部会長、都市教養学部理工学系 教授）

※ 平成 28（2016）年度前期の結果に基づく報告。

ただし、未修言語科目は後期にアンケートを実施しているため、平成 27（2015）年度後期の結果に基づく報告。

授業改善アンケート実施状況

1 調査概要

(1) 実施時期

前期：平成 28 年 7 月 4 日～7 月 15 日 後期：平成 29 年 1 月 6 日～1 月 23 日

(2) 実施対象科目

| | |
|----|--|
| 前期 | <ul style="list-style-type: none">○ 基礎科目群<ul style="list-style-type: none">・ 基礎ゼミナール・ 情報科目（情報リテラシー実践 I ・ I A）・ 実践英語科目（実践英語 I a）・ 理系共通基礎科目・ キャリア教育科目○ 教養科目群○ 基盤科目群 |
| 後期 | <ul style="list-style-type: none">○ 基礎科目群<ul style="list-style-type: none">・ 情報科目（情報リテラシー実践 II A ・ II B ・ II C）・ 実践英語科目（実践英語 II b）・ 未修言語科目（ドイツ語 I ・ フランス語 I ・ 中国語 I ・ 朝鮮語 I）・ 理系共通基礎科目・ キャリア教育科目○ 教養科目群○ 基盤科目群 |

(3) 質問項目

問 1：この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問 2：授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問 3：授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？

（予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。）

問 4：この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）。

問 5：この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください。

問 6：この授業について改善してほしい点を、可能ならば具体的な改善案も含めて書いてください。

問 7：その他、この授業やカリキュラム全体および授業設備等について、自由に意見を書いてください。

問 8～問 10：＜ 科目群・科目種別ごとの質問 ＞

問 11・問 12：＜ 教員ごとの質問 ＞

2 実施状況（前期）

(1) 全体

対象科目数：370 科目

実施科目数：328 科目

実施率：88.6%

履修登録者数：20,535 名

回答者数：13,710 名

回収率：66.8%

（対象科目における履修登録者数）

(2) 各科目群・科目種別

次頁以降の「現状と課題」を参照

基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

基礎ゼミナール部会長
都市環境学部建築都市コース准教授
権藤 智之

【はじめに】

昨年まで3年間、基礎ゼミナールを担当した経験から、基礎ゼミナールの目的の第一は、大学に入ったばかりでやる気に満ちた1年生の前期に、大学での学びを軌道に乗せることだと考えている。具体的には、大学での勉学・研究に役立つレポート作成、プレゼンテーション、討論といったスキルを身に付けるとともに、多様な分野の教員が自由にテーマを設定し、様々な学科・コースの学生と交流しながら課題解決にあたることで、高校までのスカラ的な教育から、大学でのベクトル的な教育への移行を学生に印象づけ、その面白さを実感させることが目的である。

基礎ゼミナールは全学で1年次必修科目であり、本年度は1,651人の履修者に対して81クラスが開講された。1クラスの定員は22名、平均20名程度の小規模クラスで開講されることも基礎ゼミナールの大きな特徴である。以下では、学生を対象にして行われた「授業改善のためのアンケート」の結果の概要を報告する。

【調査対象と回収率】

学生用アンケートの調査対象者は、各基礎ゼミナールの受講者である。回答率について、81クラス中70クラスでアンケートが実施され（実施率86.4%）、履修登録者1,651名中、1,342名から回答を得た（回答率81.3%）。昨年度の実績と比較すると、クラスの実施率は86.6%から微減したものの、学生の回答率は78.9%から2ポイントほど増加した。

【質問項目】

質問項目の問1～4は、全体に共通する項目であり、問8～10は基礎ゼミナールについての個別の質問項目である。

基礎ゼミナールの個別質問項目は、前年と同内容となっており、問8「この授業を通じて、問題発見と、その解決に向けた自発的な取り組み姿勢の重要性を認

識した」、問9「この授業を通じて、議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた」、問10「グループでの調査や討論を通じて、他所属の学生とも良好な人間関係を形成することができた」の3問である。問8は主体的な学び、問9は自己表現能力、問10は人間関係の構築に関するものである。

【アンケート結果】

(1) 共通事項

問1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった」の回答平均値は3.97と高いが、問8、問9、問10と比べると少し低い。シラバスに組み込む情報については教員間の差が見られるが、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の合計が10%を超えることから改善の余地があると考えられる。

問2「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた」について、平均値は4.06である。回答の内訳を見ると「ややそう思う」が45.4%と半数近くを占めている。「授業を理解できた」という教員からの一方向的な表現が、基礎ゼミナールの趣旨とは少し相性の悪いものだったかもしれない。

問3「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか」について、「ほぼ0時間」と回答した学生は23.0%と昨年より1.8ポイント減少した。昨年と比べ「30分程度」の回答が3.5ポイント上昇したことから、少しでも講義以外の時間を学習に使う流れが見られ始めたと理解したい。

問4「この授業で修得・向上できた知識や能力」を見ると、「幅広い教養としての知識」51.2%、「コミュニケーション能力」41.3%、「情報活用能力」40.0%の順に高い。特に情報活用能力は昨年調査から7.9ポイントと高い伸びを示した。一方、「能動的学習姿勢」28.9%や「総合的問題思考力」20.0%は、上記の項目に比べると向上の余地があり、ゼミナールの課題設定等でより一層の工夫が望まれる。

(2) 個別質問

次に、基礎ゼミナールの個別質問項目への回答について見てみる。問8の主体的な学びは平均値が最も高い。問4で「能動的学習姿勢」が修得・向上できたと答えた割合は3割弱とやや低めであったが、能動的学習の重要性は認識したと考えられる。問9自己表現能力についても、3分の1以上の学生は向上させられたと答えている。問10人間関係の構築については、問8、9と比べてやや平均値が低い、3問全体の平均値はいずれも4を超えており、基礎ゼミナールの目的はほぼ達成されていると考えられる。

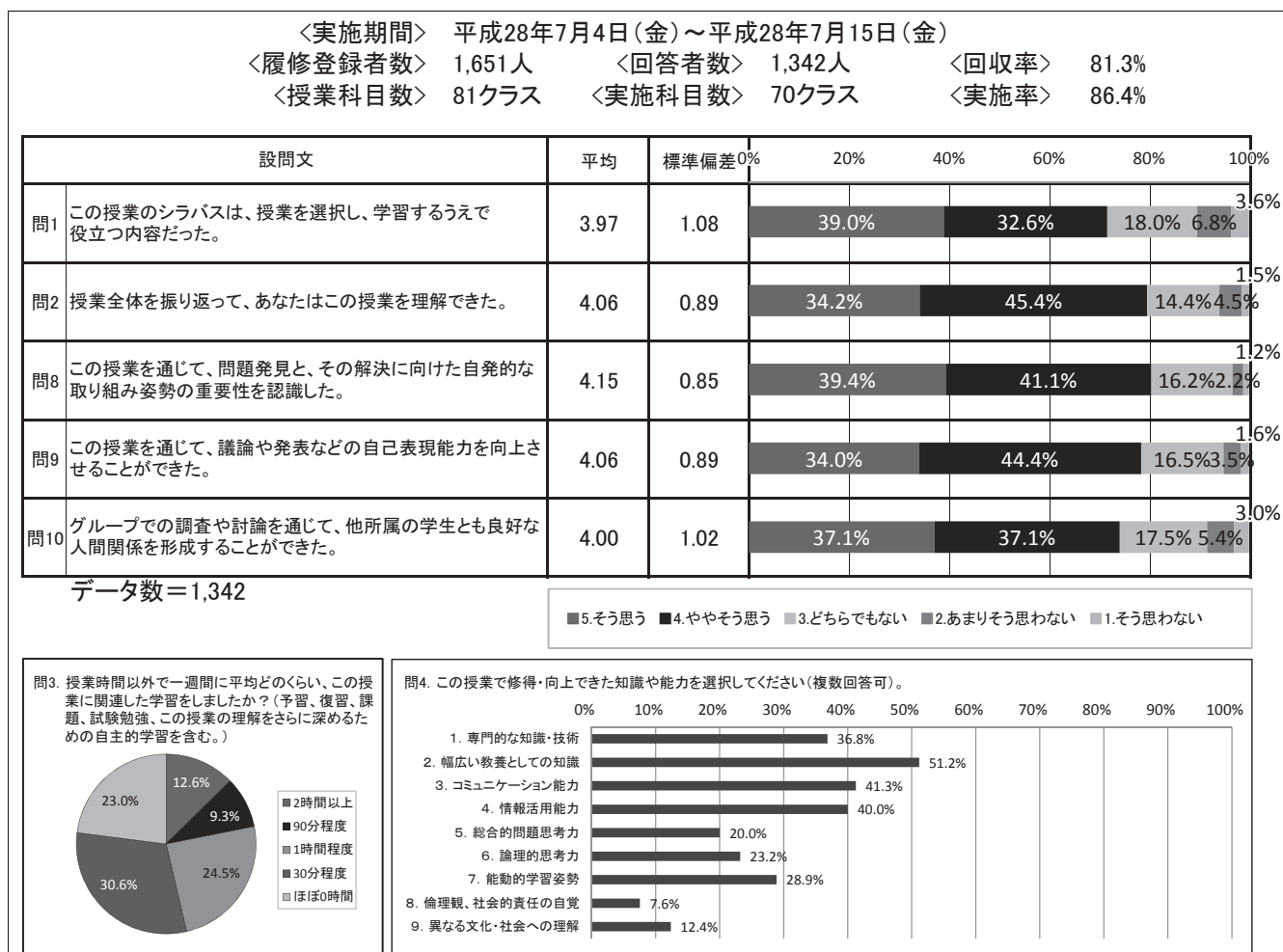
【自由記述欄】

問5から問7については自由記述方式による回答である。問5「この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください」に対する回答として目立つのは、「的確なアドバイス」、「修正点の指摘がよかった」など、学生へのフィードバックを評価するものである。

また「普段読まない本を読むことができた」、「見学や実習を行った」など通常の座学とは異なる形式に対する満足度も高い。問6「この授業についての改善点」では、ゼミナールの段取りへの不満（発表と質疑応答が別日、グループワークの時間が十分ではない、など）が複数見られる。グループワークへの要望や、他学生の態度の悪さをあげた回答を見ると、学生もこの講義に対して相応の期待をしていたことが伺える。問7の自由回答では、回答者の偏りもあると思うが、基礎ゼミナールに対して肯定的な意見が多く見られ、教員の努力は評価されていると前向きに捉えたい。

【おわりに】

以上、学生を対象に行われたアンケートの結果を概観した。基礎ゼミナールに対する学生の満足度は高く、授業目的はおおむね達成できていると考えることができる。



情報リテラシー実践Ⅰ授業改善アンケートの結果と情報倫理教育

情報教育検討部会長
大学教育センター教授
永井 正洋

【はじめに】

情報リテラシー実践Ⅰは、基礎的な情報活用の実践力を育成する科目として設置されている。近年、より専門性を高めた授業として情報リテラシー実践ⅠA（表計算ソフトを利用した統計処理）、情報リテラシーⅠB（表計算ソフトを利用した基礎的プログラミング）という科目も設定した。現在は、これら3科目のうち1科目を選択必修として、学部・系・コースが指定しているが、実際にはⅠとⅠAだけの開講となっている。

本稿では、2016年度の前期末に行ったFD委員会実施の情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠAに関する授業改善アンケートの結果について報告する。また、ここ数年力を入れているeラーニングを活用した情報倫理教育についても簡単に述べる。

【授業評価の方法】

まず、授業改善アンケートの質問項目だが、共通項目が問1～7、個別質問項目が問8～10となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。実施状況については、後掲の図中に示している。

【結果と考察】

問1～10は、FD委員会が実施した授業改善アンケートの結果である。問8（満足度）からは、76.3%の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問9（難易度）に関しては、現在の学習内容を23.3%の学生が容易だと思うのに対して、42.0%の学生が未だなお難しいと思っており、例えば、情報リテラシー実践Ⅰの学習内容を現在より専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問3（授業外学習時間）からは、授業外での学習について、30分未満の学生が72.2%（昨年度69.7%）いることが示されている。ここで一昨年度が81.4%であったことを勘案すると、反転学習などの取組の成果ともいえるが注視が必要である。最後に、問

4（知識・能力獲得）を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できたと回答していることが分かるが、現在、情報倫理の育成に関して要請の多いことを勘案すると、「8. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目を今後、伸ばしていく必要があると考えられる（H26=10.8%→H27=8.7%→H28=8.9%）。

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果（図は不掲載）に関して報告する。4つの質問項目からは、学生の77.4%が、情報リテラシーが身に付いたと回答すると共に、76.1%が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、78.8%の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に満足していることが分かった。

以上、まとめると、おおむね学生は意欲的に授業に取り組む、教員の説明や対応も評価すると共に、情報リテラシーが身に付いたと認識している。さらに、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。このような傾向は、ここ5年以上続いており、情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠAのカリキュラムが、継続かつ安定して学習者に評価及び支持されていると考えられる。反面、課題となる側面としては、授業内容をどちらかというと難しいと感じている学生が多くいることと、授業外での学習時間が不足していることなどがあげられる。

【情報倫理教育の推進】

近年の高度情報化社会の進展に伴って、インターネット上では、SNS（Social Networking Service）や電子メール、動画サイトなど様々なサービスが提供されている。これらは学生にとって大変身近であるが、反面、個人情報流出や誹謗中傷、犯罪に巻き込まれるなどの問題も指摘されている。情報リテラシー実践では、これら問題に対して、情報倫理について第1講と第4講で、幅広く関連する学習をこれまで扱ってきたが、昨今の学生を取り巻く情報環境を勘案して、学習後に情報モラルやルールについて、身に付いたかどうか

かを測る学習到達度評価を2015年度より、以下のとおり実施した。さらに2016年度からは、そのテスト結果を成績評価に反映させている。

名称：情リテ情報倫理テスト

対象：第1学年学生全員

実施時期：第4講の情報倫理学習後

実施時間：第4講の授業時間内または、終了後、1週間以内の授業時間外にて行った

評価：8割正解で合格、不合格者は到達するまで繰返

方法：本学 kibaco に設置した学習到達度テストを使用

出題：主に授業で扱う情報倫理講習用スライドの学習内容に関連した20問からなるテスト

【情報倫理教育用コンテンツの配置】

また、授業内で扱う情報倫理講習用スライド(下図)を他学年の学部学生や大学院生にもオンデマンドな利用ができるよう、kibaco や本学 OCW (Open Course Ware) にコンテンツを配置した。また、部局からの要請で、留学生への配慮として英語版も準備中である。



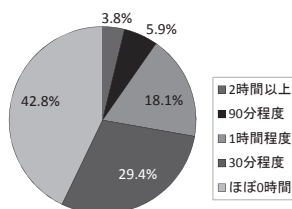
〈実施期間〉 平成28年7月4日(金)～平成28年7月15日(金)
 〈履修登録者数〉 1,647人 〈回答者数〉 1,350人 〈回収率〉 82.0%
 〈授業科目数〉 38クラス 〈実施科目数〉 37クラス 〈実施率〉 97.4%

| 設問文 | 平均 | 標準偏差 | 0% | 20% | 40% | 60% | 80% | 100% |
|---------------------------------------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| 問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。 | 3.63 | 1.13 | | 26.0% | 30.8% | 30.2% | 6.4% | 6.6% |
| 問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。 | 3.91 | 0.96 | | 26.6% | 49.8% | 14.9% | 5.2% | 3.5% |
| 問8 この授業を受講して満足した。 | 4.01 | 0.99 | | 35.2% | 41.1% | 16.6% | 3.3% | 3.8% |
| 問9 授業全体を振り返って、この授業は難しかった。 | 3.23 | 1.10 | 12.2% | 29.8% | 34.8% | 15.3% | 8.0% | |
| 問10 チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応した。 | 4.16 | 1.03 | | 49.5% | 26.8% | 17.4% | 3.1% | 3.2% |

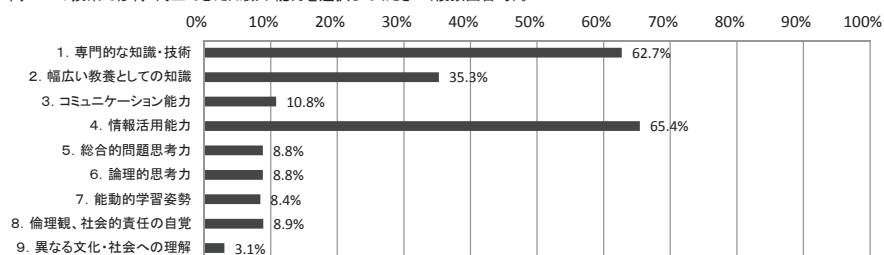
データ数=1,350

■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまりそう思わない ■1.そう思わない

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。)



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



実践英語教育の授業改善アンケートについて

授業改善アンケートの検討とこれからの課題

英語教育分科会座長
都市教養学部人文・社会系教授
中村 英男

【はじめに】

本学の英語教育は2013年度から新たなカリキュラムを導入し、今年度は4年目に当たる。新カリキュラムでは、従来どおり統一教科書を使用するクラス(Bレベル)の他に、新たにAレベル(特に英語運用能力の高い学生群)とCレベル(初学者を含め、特段の配慮が必要と思われる学生群)を設定し、レベルわけに応じた教材及び教育方法を用いて、きめ細かい指導を目指している。クラスサイズは、Aレベルは約8名。Cレベル約10名。大半の学生が所属するBレベルでは約20名を基準としており、少人数教育が実施できている。

【個別質問事項について】

統一教科書について 統一教科書として用いた Reading and Vocabulary Focus 4 は大学教養レベルにふさわしい英語読解能力を養成し、語彙力を増強すると共に、論理的な思考法を身に付けることを目指している。内容は National Geographic 誌の記事を編集したもので、文化系理科系を問わず大学生の知的好奇心を満足させるべく、歴史や都市計画はもちろん、災害への対処や芸術作品の真贋技術など多彩なテーマで人間と世界について深く考えさせる事のできる教科書である。また各セクションに2種類の読み物が用意され、学生の能力に応じてやや読みごたえのあるレベルの英文も提供できるようになっている。

問8ではこの教科書の難易度について尋ねている。その結果「易しい」2.7%「やや易しい」8.5%「ちょうど良い」69.1%「やや難しい」16.6%「難しい」3.1%であった。7割程度の学生が難易度は適切であると評価している。ちなみに2011年度以降「(やや)難しい」という評価の割合は22.4%、4.9%、42.1%、50.6%、25.6%と推移し、本年度は19.7%と顕著な改善が見られる。

5段階評価(5:易しい、1:難しい)の平均値は2008年度以降、2.78、3.28、3.14、2.93、3.53、2.55、

2.44、2.81と推移し、本年度は2.91となっている。教科書を「(やや)難しい」と評価した学生の割合からも、5段階評価の平均値からも、比較的広範囲の能力の学生に受け入れられたものと考えている。ただし、2013年度以降は新しいカリキュラムとなり、AレベルとCレベルの学生は統一教科書を使用しておらず、直接の比較はできない。なお、今回の教科書については National Geographic 誌の用意するHPなどで関連する記事に接する事ができ、意欲を持った学生の時間外学習に資する点があったのではないかと考えている。

学生の関心 問9では「授業の中で一番関心をもって取り組むことができたのは何か」を尋ねている。結果は「内容理解」43.9%「英文和訳」26.0%「語彙の学習」15.1%「構文理解」11.1%であった。昨年度はそれぞれ44.2%、24.9%、16.0%、11.7%であり、一昨年度はそれぞれ47.2%、28.0%、13.5%、9.6%であり、特異な変化は見られない。

今後の学習との関わり 問10では「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか」と尋ねている。「そう思う」が25.2%「ややそう思う」が43.9%、合計は69.1%となっており、昨年度の64.3%に比して5ポイント近い改善が見られる。5段階評価(5:そう思う、1:そう思わない)の平均値は、2008年度以降、3.19、3.14、3.28、3.41、3.31、3.68、3.71、3.66と推移して、本年度は3.78に達している。これは記録の残る範囲で最も良い評価だと言える。

【共通の質問事項について】

シラバスについて 問1では「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だったか」を尋ねている。結果は「そう思う」「ややそう思う」を合わせ49.2%でほぼ例年どおりの評価であるが、実践英語Iは必修科目であるので、授業選択とは関わりなくここでは学習の方向性があらかじめ学生に通知されているという認識で良いであろう。

授業の理解度 問2ではこの授業の理解度を尋ねている。結果としては「そう思う」「ややそう思う」を合わせると76.6%になり、昨年度の73.0%、一昨年度の69.1%に比し改善傾向が見られる。理解に問題を感じている学生の割合は7.9%であり、この数を確実に減らしていく努力が教員と学生双方に求められている。

学習時間 問3では、一週間の平均的な授業外学習時間を尋ねている。「1時間程度」以下の割合は2011年度以降、84.0%、87.0%、79.7%、81.4%、85.2%と推移し、本年度は80.8%となった。「90分程度」以上の割合は19.2%で昨年度の14.8%より改善が見られる。「ほぼ0時間」という学生の割合は2014年度以降、15.7%、19.5%と推移し、本年度は16.1%となっている。かなりの教員が単語テストや課題を出している事を考えると少し違和感のある数字である。それらの課題を授業外学習時間とは捉えていない学生が一定数いる可能性が考えられる。

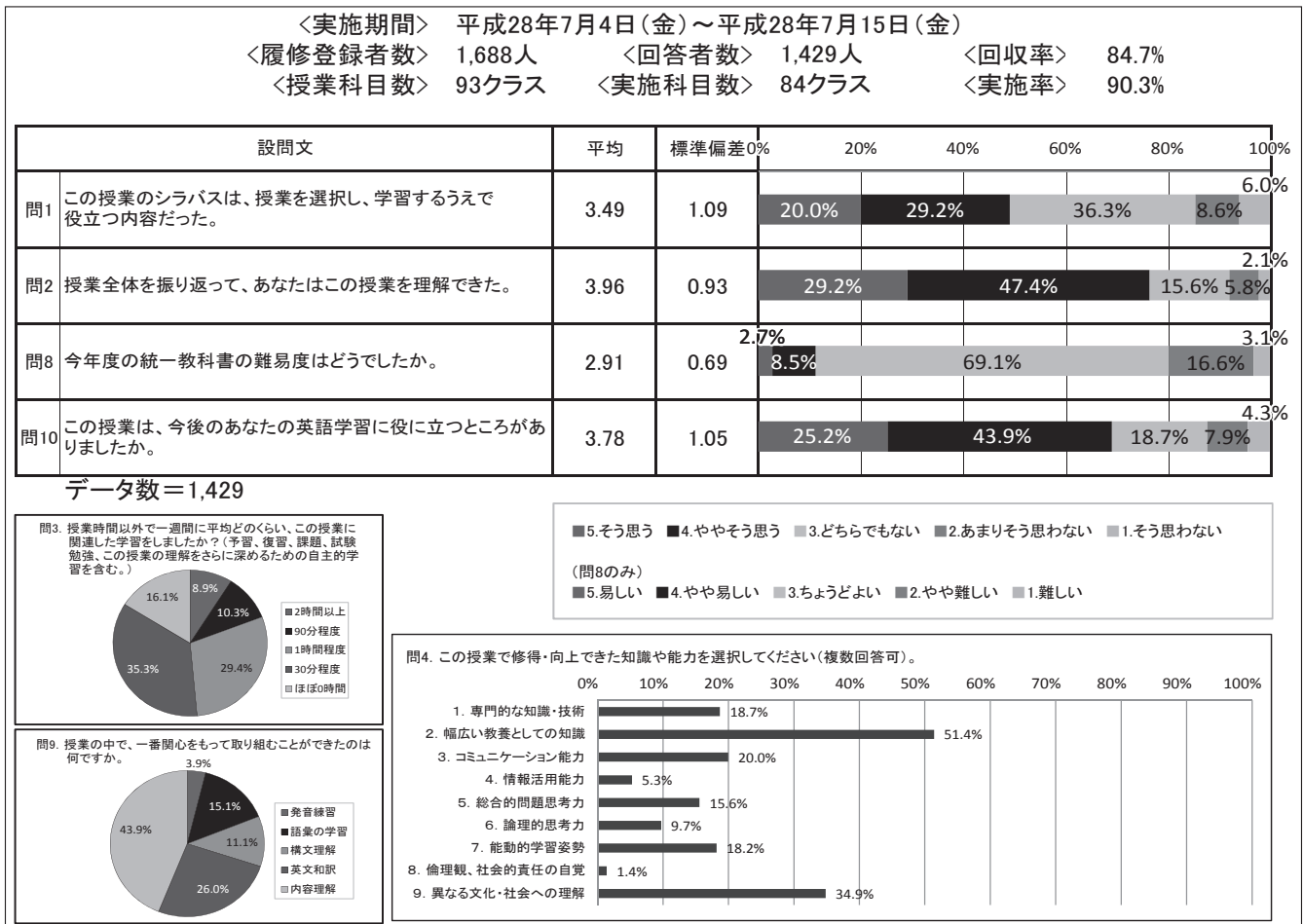
授業で得られるもの 問4では「この授業で修得・向上できた知識や能力」を複数回答で選択させている。「幅広い教養としての知識」51.4%（昨年度47.7%）「異なる文化・社会への理解」34.9%（昨年度29.6%）「専門的な技術・知識」18.7%（昨年度20.4%）、さら

に「コミュニケーション能力」20.0%（昨年度18.8%）が選択されている。これは実践英語科目のシラバスに掲げられる目標の一つである「言語の背景にある文化・歴史・倫理などを深く理解し、知的視野を広げる」という目標がある程度達成されている指標と見なすことができる。

【今後の課題と展望】

新たなカリキュラムによる実践英語の実施後、4度目となる授業改善アンケートは着実に改善傾向を示しており、さらなる授業改善に向けて教員を鼓舞するものとなっている。習熟度別クラス編成がTOEICによって行われているため「実力をより客観的に把握できる」点を評価する学生が多いようだ。また、期末試験としての統一試験廃止により、それぞれのクラスの習熟度に合わせて柔軟に授業が運営できている点は、以前の状態に比べてより学習の実をあげるのに役立っていると深く信じる。

今後は新たなカリキュラムをさらに良いものにし、充実した授業を行うことが必須である。特に統一教科書の難度と内容を精査し、授業の理解度を上げると共に、学生の時間外学習を促す工夫が求められている。



未修言語の授業改善アンケートについて

未修言語科目部会長
都市教養学部人文・社会系准教授
西山 雄二

【はじめに】

本学では、大学入学後に初めて学ぶ言語科目のことを「未修言語科目」と呼んでおり、「第二群」（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語）、「第三群」（ロシア語、スペイン語、イタリア語、ギリシャ語、ラテン語）の二つの科目群から構成される。本学では多くの学科が第二群の科目を必修科目、あるいは推奨科目に指定している。未修言語は人文・社会系の担当教室のコーディネーターと、未修言語科目部会場の場を中心とした各言語担当教室の情報交換により、授業の健全な運営と不断の改革が行われてきた。授業（特に初級）の設定する目標は、大学入学後に初めて学ぶ外国語ということ鑑みて以下の二点に集約されよう。

- ①発音、文法、基本語彙など未修言語の基礎の習得。
- ②異文化に触れ国際的な視野を育むきっかけをもつ。

また近年の傾向として、本学では外国語の資格取得を目指す学生が増加していること、本学と世界各地の大学との国際交流提携が推進されていることが挙げられる。さらに2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を間近にひかえた今日、英語以外の多様な言語学習と異文化理解の促進のために、未修言語教育はますます重要となりつつある。

【個別の質問項目】

問8は、選択した言語の種別を問う設問である。各項目がどの言語科目に対する回答なのかを把握し、より精確な実態調査を行うために設けられている。中国語とドイツ語が各30%程度、フランス語が20%程度、朝鮮語が10%程度という割合はここ数年間さほど変化していない。

問9と10は2015年度のアンケートから新しく設定された設問で、「はじめに」で述べた未修言語教育の二つの目標に対応するものである。この質問は、学生の未修言語に対する満足度や要求、異文化理解の程度を反映するもので、授業改善に大きな役割を果たしてくれる。

問9は、授業で外国語を学ぶなかでもっとも有益だった学習内容を問う設問である。未修言語の初級クラスにおいて、受講生は話す・聞く・読む・書くの四技能を総合的に習得していく。どの学習内容に関心をもったのかを理解することで、学生の学習傾向を把握することができる。

結果は、「文法説明」40.2%、「発声練習」30.8%、「語彙の学習」13.4%、「和訳」10.2%、「外国語作文」5.4%という順に数値が出揃った。言語の法則性を理解する「文法説明」の回答がもっとも多かった。「発声練習」も好評で、異国の言葉を自分で口にする楽しさが伝わったのではないだろうか。「語彙の学習」では、単語をひとつずつ習得することで自分の世界が広がっていく経験ができる。「和訳」は、外国語を正確に読み取る力を身に付けるためには効果的な学習だが、低い数値にとどまった。「外国語作文」は日本人学習者がつねに苦手とする学習で、わずかな数値の回答にはうなずける。

問10は、未修言語の授業が異文化への興味・関心を引くきっかけとなったかどうかを問う設問である。そうした関心を抱くことで、海外留学などを視野に入れて学習を続けていくモチベーションともなるだろう。

結果は、「そう思う」31.8%、「ややそう思う」49.3%が計81.1%と大半を占めた。未修言語の授業が、言語の習得だけでなく、異文化理解への契機になっていることがわかる。実際、各々の教員は、スライド教材や動画、音楽などを使用して、外国文化の紹介をうまく授業に取り入れている。

【共通の質問項目】

問1で問われた「シラバスの有用性」については、「そう思う」「ややそう思う」が計52.2%で、昨年度の56.2%と比べるとわずかに減少している。ただ、「あまり思わない」「そう思わない」は昨年度とほぼ同じで10.0%にとどまっているため、シラバスの書き方が悪化したとは言えないだろう。一方「どちらでもない」が37.8%と高い数値にとどまっていることは、シラバ

スの書き方に依然工夫の余地があることを裏づける。

問2の授業理解に関する質問に関しては、「そう思う」「ややそう思う」が計71.6%と前年度の70.6%から1.0ポイント上昇し、授業、教科書の難易度が学生の要求や能力に近づいたことが裏付けられる。

問3については、授業以外での学習時間が90分程度以上の割合は計8.9%で、昨年の10.5%と比べて微減である。週1時間程度以下の割合は依然71.6%と高い数値を示し（前年度70.1%）、ほぼ0時間の学習者も19.5%に上っており、これは学習指導上の課題である。未修言語を習得するためには、予習や復習、実践が必須だが、この結果は大多数の受講者は授業外ではほとんどその機会を持たないことを示している。

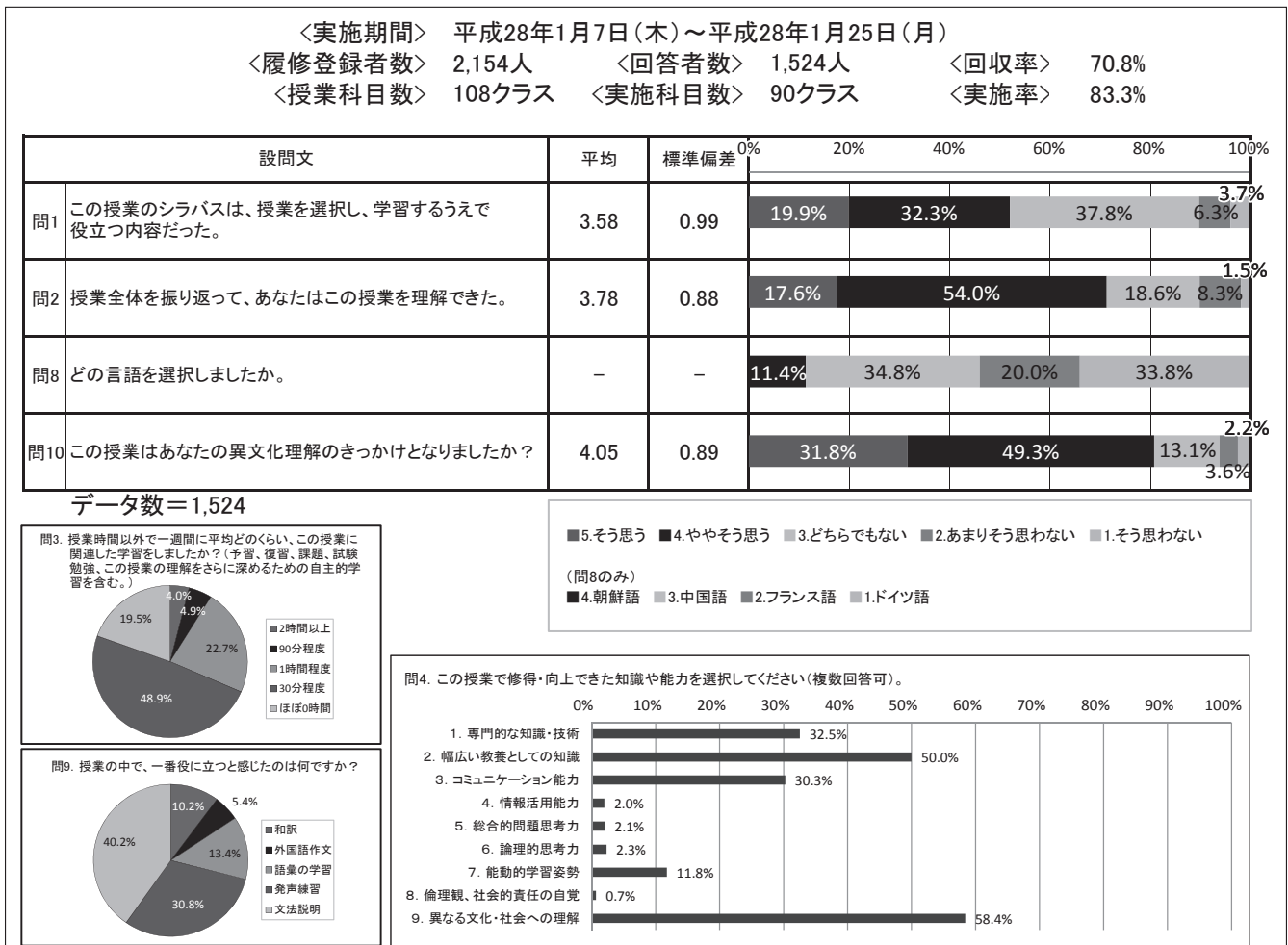
問4での、授業を通して得られた知識・能力として、「専門的な知識・技術」「幅広い教養としての知識」「コミュニケーション能力」「異なる文化・社会への理解」がいずれも高い数値を示しており、未修言語科目の教育目的はおおむね達成されていると評価できよう。言語の習得には主体性が不可欠であるが、「能動的学習姿勢」は11.8%と低い数値で、改善の余地があり、指導の際の更なる工夫が求められる。

【全体的な傾向と今後の課題】

アンケートの集計結果から得られる概評として、シラバスが授業への有益な手引きとなり、受講生が外国語の基礎を十分に理解しているという傾向がうかがえる。それぞれの項目で前年度調査より大きな変動はなく、未修言語学習が安定した成果を上げていると言える。

ドイツ語・フランス語・中国語に関しては、担当教員の多大な尽力もあり、交換留学制度が充実している。1年間の長期留学だけでなく、夏季休暇中の短期研修も整備されていることは学習の継続へのモチベーションとなっている。国立台湾師範大学とウィーン大学に加えて、2017年度からはフランスのリヨン・カトリック大学付属語学学校での短期演習も開始される予定である。

今後の課題としては、やはり学習時間の確保が重要だろう。言語の習得はどうしても時間が必要である。新しい言語を学ぶには、授業後の予習・復習を通じて、基礎を少しずつ確かなものにするしかない。ルーティンで宿題を与えるだけでなく、受講生が自ら進んで外国語に触れたいという意欲をもてるように担当教員は常に工夫をする必要があるだろう。



理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて

その現状、経年変化、今後の課題

理工学系FD委員会委員長
都市教養学部理工学系物理学コース教授
森 弘之

【理系共通基礎科目の目的・目標】

理系共通基礎科目は、数理科学関係、物理学関係、化学関係、生命科学関係、電気電子工学関係、機械工学関係の6分野から、全学部学生を対象に、一般教養の自然科学系の授業として開講されている。理系共通基礎科目として2016年度前期に開講された科目は、微分積分I、線形代数I、微分積分III、線形代数III、解析入門I、離散数学入門、基礎線形代数A、教養基礎物理I、初等物理I、専門基礎物理I、物理学概説I、物理通論I、化学概説I、一般化学I、一般生物学I、生物学概説IA、工学系電磁気学、工学系電気回路、電気数学、材料の力学第二B、工業の力学B、機械の力学Bであり、これらが今回のアンケートの対象となっている。

【理系共通基礎科目独自の質問項目と評価結果】

科目群独自の質問として、受講者数、授業環境、授業テーマに関する以下の3項目を選定し、64の授業科目4,602人の受講者のうち、61科目3,433人から回答が寄せられた。

問8 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか。

問9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。

問10 この授業テーマは自分の関心にあっていた。

回収率は、一昨年度の66.9%、昨年度の74.4%を上回り、74.6%であった。

問8のクラスの人数については、ちょうどよかったという意見が68.6%と最も多く、これは一昨年度の67.6%、昨年度の65.4%を超えて伸びている。やや多かったという意見と多かったという意見が合わせて28.7%となっていたが、これも一昨年度の30.3%、昨年度の32.4%より低下し、クラスの人数については肯定的意見が増えた。また、問9の授業環境については、快適あるいはとくに問題がないと感じた学生が77.9%となり、過去の数字よりも高い。これは、空調等への

評価が上がっているためと思われる。問10の授業テーマについても、自分の関心にあっていると答えた割合が一昨年度、昨年度と比較して増加している。ここ数年の教員による授業改善の取り組みの効果が現れていると思われる。

【共通の質問項目の評価結果】

共通の質問項目は以下のように設定されている。

問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか。

問4 この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください。

問1のシラバスについては、およそ半数の学生が授業の選択や学習に役立ったと答えており、否定的意見は昨年度よりも少なくなった。問2の理解度については、肯定的意見が昨年度よりも増えているものの、2割を超える学生が理解したとはいえないと答えており、さらなる工夫が求められる。問3の学習時間については、大きな改善は見られず、相変わらず4人に1人がほとんど授業時間外学習をしていないと答えている。ただし、レポート課題の作成を「学習」と捉えずに、一部の学生が回答にこの時間を含めていないのではないかと指摘もある。問4の修得技能については、専門的な知識や技術、あるいは論理的思考力が多く上がっているが、これは理系の授業としての特徴といえる。

【集計結果の経年変化に関する所見】

質問項目が変わった年もあるためすべての項目について経年変化を追えるわけではないが、問1、問2、問9、問10については過去数年分の変化をたどるこ

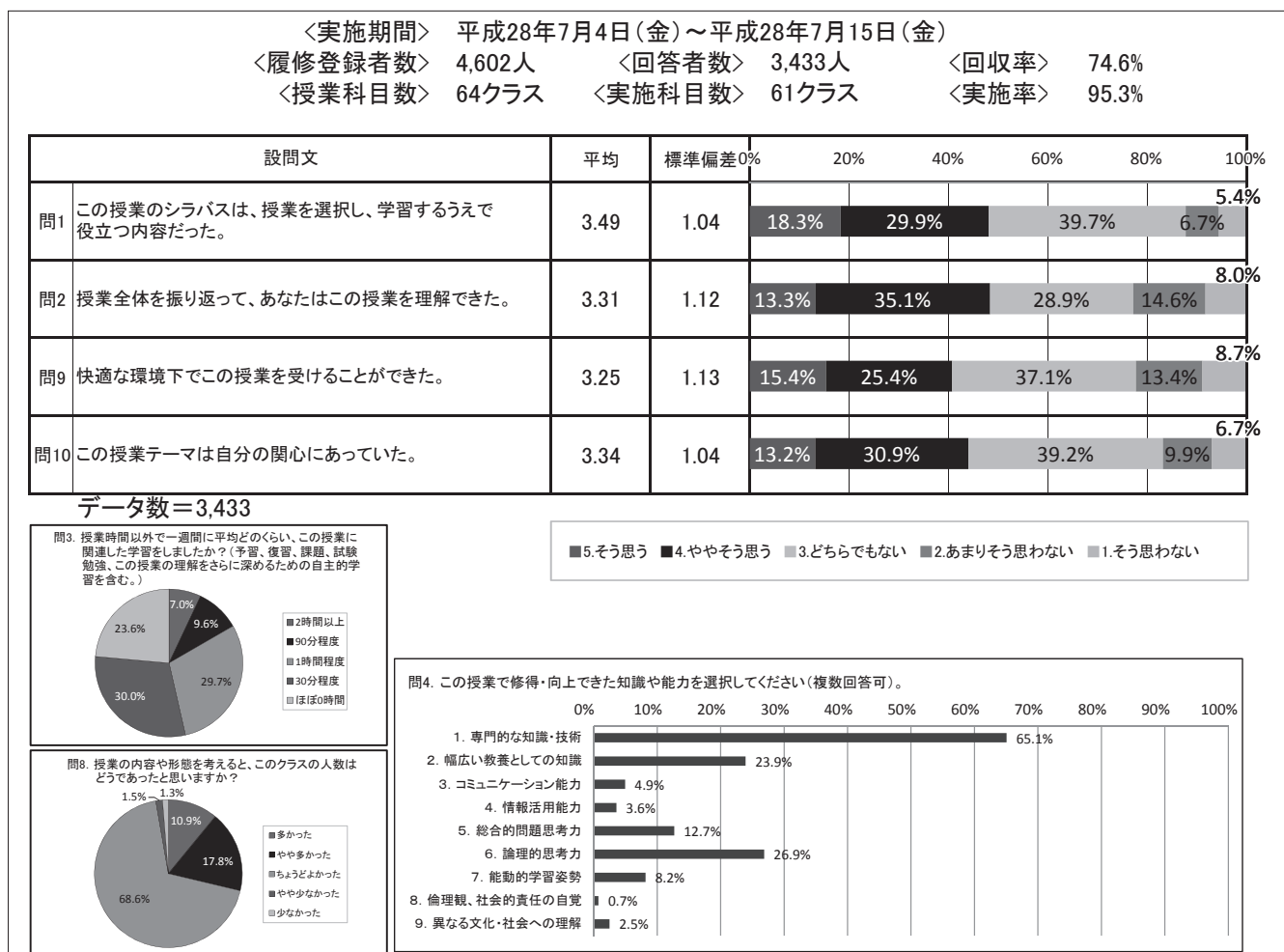
とができる。前期と後期とでは状況も異なるため、前期に絞って年度比較をすると、2016年度はこれらのいずれの質問においても最も高い平均値を出している（肯定的意見ほど数字が高い）。誤差もあろうが、改善の努力や工夫が少しずつ数字となって現れていると思われる。

【今後の改善に向けた課題】

経年変化を見る限り、2016年前期は高い数字を出せたが、小数点以下第2位の数字を争う程度の微増に過ぎないとも言える。しかし授業改善に向けた努力を継続していくことにより、この小さな数字が積み重なり、数年かけて改善の成果が目に見える形が出てくるだろう。一方で、アンケート結果の評価点を上げることが目的化しては本末転倒である。評価項目にない点も含め、授業に対する満足度を上げていくためのFD活動が今後も一層必要になる。

授業環境や設備に関する評価が、他の質問項目の評価に比べて低いのは、まだまだ改善の余地があるということを示している。特に空調などは自由記述欄に今も不満が書かれている（必ずしも同じ意見とは限らず、同じ教室でも「暑すぎる」と「寒すぎる」の両意見が出てくることがある）。教員にとっても、快適な教室空間は、よりよい授業を提供する上で重要な要素の一つである。冷暖房費との兼ね合いもあり、簡単ではない問題だが、大学側の努力によりこれまで徐々に改善が進んできた。それは、アンケートから抽出される重要な意見を大学側にフィードバックしてきたからであり、このルートを通じた環境改善の努力もさらに進めていく必要がある。

上記で明らかなのは、自由記述の重要性である。教員や大学に直接希望を伝えられる貴重な機会であることから、学生の自由記述欄の積極的な活用を期待したい。



教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

教養・基盤科目群検討部会長
都市教養学部理工学系数理科学コース教授
倉田 和浩

【はじめに】

全学共通科目の再体系化により、以前の都市教養プログラムは、2013年度から教養科目群・基盤科目群に分類されました。教養科目群は、「都市・社会・環境」「文化・芸術・歴史」「生命・人間・健康」「科学・技術・産業」の4つのテーマを通じた知識修得から、社会人として必要な幅広い教養を身に付け、総合的な思考力や問題解決能力の育成を目指しています。基盤科目群は、「人文科学領域」「社会科学領域」「自然科学領域」「健康科学領域」の学問形成に不可欠な基礎的・導入的な知識や能力の修得により、各専門分野の学習に備える、あるいは専門とは異なる分野・領域についての知識やものの考え方の学びを通して、多角的な視野を持つことを目指しています。ここでは、教養科目群、基盤科目群の2016年度前期開講科目に対して実施した授業改善アンケートの結果について、その概要を報告します。

【アンケート実施状況について】

アンケートは2016年度前期に開講された94クラス中76クラスで実施され、履修登録者数10,947人中、6,156人から回答を得ており、回収率56.2%でした。過去2年間の同時期の調査と比較すると、2014年度92クラス中79クラスで実施、履修登録者数13,254人中、回答7,049人（回収率53.2%）、2015年度93クラス中80クラスで実施、履修登録者数11,625人中、回答6,203人（回収率53.4%）でしたので、3年間ほぼ同程度ではあるものの、実施科目数は若干少なめであり、回収率は少し上がったともいえます。

【質問項目とその評価結果及び所見】

教養・基盤科目群では、共通質問項目に加え、独自の質問項目を3問設けています。（具体的な質問項目はグラフを参照ください。）

以下では、問1から問4の共通質問項目と上の個別の質問項目問8から問10への回答結果の動向について検討したいと思います。

まず共通項目の問1のシラバスの有用性への質問の回答平均は3.70であり、「そう思う」「ややそう思う」と有用性を認める学生が60.2%です。昨年度は回答平均3.68、有用性を認める学生が59.3%であり、わずかですが増加傾向にあり、ここ数年のシラバスの充実策が有効に働いているように思います。一方、「そう思わない」「あまりそう思わない」と有用性を感じない学生は、この2年間ほぼ横ばいです。教養・基盤科目は新生が多く受講する科目でもあることから、講義選択の道標として学生自ら活用できるよう、一層改善を心がけていく必要があります。

次に、問2の理解度を尋ねた質問と、問8の授業の難易度の問いに対する回答結果を見てみます。問2の回答平均は3.55（'15年3.53、'14年3.57）、問8の回答平均は2.64（'15年2.64、'14年2.64）であり、前後期含めてもいずれもほぼ横ばいです。問2の理解度について、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて59.0%（'15年57.5%、'14年60.1%）であり、昨年度と比べ若干の増加が見え、6割程度の学生が理解できたと認識しています。一方、「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な学生は15.9%（'15年15.0%）と、昨年度と比べ若干の増加傾向にあります。問8の難易度についての結果は、おおむね過去2回と同じであり、「ちょうどよかった」の比率が57.7%（'15年59.8%、'14年59.0%）と若干の減少傾向が見られるものの、「やや易しかった」4.3%（'15年3.8%、'14年4.3%）と「やや難しかった」26.7%（'15年27.0%、'14年25.2%）を加えると88.7%（'15年90.6%、'14年88.5%）とほぼ例年と同じ9割程度であり、教養・基盤科目群としては適切な難易度であったといえます。問2と問8から理解度と難易度のギャップについては、授業の難易度が「ちょうどよかった」、「やや易しかった」「易しかった」の合計が64.1%（'15年65.2%、'14年65.4%）であるのに対し、理解できたと認識している学生が前述のとおり59.0%であり、その差は5.1%（'15年7.7%、'14年5.3%）であり、昨年度に比べわずかながら改善されているとも言えますが、さらに改善の余地はあるように思われます。このギャップの要因としては、理解度に対して「ど

ちらでもない」と回答した学生が25.1%（'15年27.4%）おり、自分の理解度についてまだ明確な判断ができずにいると見ることもできます。

問3は授業外を含む学習時間の確保に関する問いですが、「ほぼ0時間」と回答した学生の割合は53.9%（'15年51.9%、'14年53.1%）と増加傾向にあり5割以上を占め、「30分程度」を含めると79.1%（'15年80.6%、'14年80.8%）と約8割を占めます。

共通項目問4「この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください」では、「幅広い教養としての知識」63.3%（'15年60.9%、'14年62.8%）、「専門的な知識・技術」45.1%（'15年43.1%、'14年45.5%）がそれぞれ1、2位となり、教養・基盤科目としての趣旨に沿った科目が提供されていることを示しています。また、授業により視野が広がったと思うか？という問9では、66.4%の学生が「そう思う」または「ややそう思う」と回答しており、回答平均も3.76でほぼ例年と同程度の結果でした。

受講人数についての問10への回答結果では「ちょうどよかった」が66.6%とやや減少傾向にあり（'15年69.7%）、「多かった」11.2%（'15年8.2%）、「やや多かった」18.9%（'15年17.9%）であり、一クラスの受講者数を多いと感じている学生30.1%（'15年26.1%）と増加しています。これは、2015年度から、前年度に履修者数が400名を超えた授業については、翌年度より履

修者数の上限を設定するという改善策をとっていますが、2016年度も実際に6科目（前期5科目）に上限が設定されたものの、上限設定されなかった別の3科目で400名を超えたことも1つの原因かと考えられます。

【今後の課題とまとめ】

全体的には、ほぼ例年どおりであり、シラバスに関する共通項目問1でのわずかながら改善も見られ、教養・基盤科目群としての趣旨に沿った科目提供が適切に実施されていると思います。

特に今後の課題を1つ挙げるとするならば、共通項目問3の回答結果から、授業科目に対する授業時間以外の学習時間は、受講生の8割程度が30分程度以下であった点について、改善の余地があると思われます。このことは、他の授業科目の学習にかかる時間とのバランスの兼ね合いもあると理解できるものの、学生本人が、自身の理解度が把握できていないこととも関係していると思われます。授業外学習は自分の理解を見直す上でも重要であり、学習時間の確保は、恐らく本科目群に限らない問題と思われます。演習課題だけでなく、授業での理解をさらに深めるための能動的な自主学習へと学びを深化させるには、大学教育の導入部ともいえる本科目群でも方策を講じる必要があるように思います。

